

二〇二一年四月一九日(参加者一三名)

堰落つる度に解かるる花筏	菜々
尖塔にひっかかりたる春の雲	"
クレソンを見つけてうれし花堤	"
花に酔ひ人にもまれて通り抜け	"
花吹雪虚子三代の句碑の辺に	"
聖堂のあれば訪ひもし花堤	"
春うらら上衣を腰に巻きつけて	つくし
夕されば散り散りとなる鴨の陣	"
誰もぬぬ野外舞台に初蝶来	"
岩崖の隙間隙間にすみれ咲く	有香
奥の院まで足延ばし春惜しむ	"
春愁や鳥形埴輪のうつるな目	"
風鐸の揺れて落花のとどまらず	宏虎
雨だれは和音のリズム春庇	"
花吹雪胡蝶の乱舞さながらに	わかば
走り根を階として山椿	"
花筏早瀬の波にもまれけり	かれん
手庇に仰ぐクルスに風光る	"

いはれある尼寺の春惜しみけり	はく子
聖堂の彩窓に透く春日かな	"
記帳する筆の先へと桜散る	うつぎ
記念樹の末広がりに春の風	よし子
春の夜祈りつつ折る千羽鶴	百合
節電に叶ふ明るさ春灯	きづな
花の道まっすぐ行けば教会へ	満天
春光に教会の扉を全開す	"
薔薇アーチ聖母マリアの在せりけり	"
碧天へ尖る十字架風光る	"

定例会の選

二〇二一年四月一九日(参加者一三名)